コラム Column きのうきょう

人生で大切なことを教えてくれ

この夏は私にとって、一生忘れられない夏になりました。９月に行われた日本学生選手権で、３年半マネージャーとして所属していた体育連盟水泳部を引退しました。

附属から大学に進学した私は、入学当初大学でやりたいことも見つけられず、ただ漠然と、勉強以外で大学時代に打ち込んできたと胸を張って言えるものを見つけたいと思っていました。なかなかこれだと思えるものが見つからず、学生生活をスタートさせた矢先に、友人に水泳部のマネージャーを紹介され見学に行き、その日に入部を決めました。見学に行った日のことは今でも鮮明に覚えています。熱気が立ち込める蒸し暑いプールで、みんなが真剣な表情でただひたすら、ひたむきに泳いでいる姿を見て圧倒されました。何かに向かって真剣に取り組んでいる人たちを目の当たりにし、「その一員に自分もなりたい」「そんな人たちを支える仕事がしたい」と気持ちが高揚したのを覚えています。

中大への誇り

入部してからは、初めてやることや学ぶこと、慣れない仕事も多く、自分が思っていた以上に厳しさもあり、気持ちが折れそうになることもありました。たくさんの失敗もし、迷惑をかけることもありましたが、それでも「ここでマネージャーを続けたい、役に立ちたい」と思いながら３年半、最後まで続けてこられたのは支えてくれる水泳部のみんながいたからだと心から感じています。

水泳部に入って自分自身にも変化があり、大きく成長させてもらいました。一つは、中央大学に入ってよかったと心から思えたことです。エスカレーターで進学し、自分の大学への愛着や良さを全く感じていなかった私は、日本一を誇る中央大学水泳部に入部して初めて、自分の大学への誇りを持つことができ、自分の居場所に誇りを持って過ごすことがいかに大切かということにも気づきました。

二つ目は、どんなことも相手の立場に立って考えること、冷静でいること、周りを俯瞰することができるようになったことです。多くの人数がいて、出身地も違えば好みや価値観も異なる人たちが同じ方

た水泳部

文&写真 学生記者
清水万由奈
（総合政策学部４年）

向を向くことは簡単なことではありません。マネージャーとしてどうしたら全員が最適な環境で練習してもらえるか、自分が何をしたら少しでも役に立てるのかを考える中で、一人一人の立場に立ってその人を理解することが想像以上に難しく、けれどとても大切だと実感しました。一つのことでも立場が違えば考え方も違います。思いつきで動く前に、何かをする時は一度冷静になって周りを俯瞰する、そうすれば今自分ができる最善が見えるような気がします。社会に出てからはもちろん、生きていく上で大切なことを水泳部からはたくさん学びました。

チームの輪を大切にする水泳部。
中央左に筆者の顔も見える（写真提供＝中央大学水泳部）

引退してもいつも心に

チームの一番の目標であるインカレ、１カ月のメキシコ高所合宿や年間通して数多い試合、国際大会の代表選考、夏合宿や長い長い冬場の泳ぎ込みなど、思い返せばたくさんの出来事があり、振り返っても過去にここまで熱くなれたことは水泳部が初めてで、これから先もあるかないかのそんな大学４年間だったと思います。私がチームに出来たことはどれだけあったか分かりませんが、4年間を通して得るものの方がとても多かったです。支える立場でありながら支えてもらうことの方が多く、たくさんの方々に自分が支えられて生きていることを痛感しました。

毎朝プールのドアを開けると、熱気と活気で一日が始まり、みんなの泳ぐ姿にたくさんの元気をもらいました。試合で戦う姿に感動して気づいたら涙が出ていることもたくさんありました。思い返すとどのシーンも鮮明に眼に浮かび、水泳部で過ごした時間は忘れられない大切な宝物です。

４月からは社会人として働きます。今は不安と緊張感、新たな一歩への楽しみが入り混じった感情ですが、水泳部で学んだことを活かして人として更に成長できるよう頑張りたいと思います。最後に、中央大学水泳部のマネージャーとして過ごせたこと、お世話になった監督を始めコーチ、スタッフの方々、支えてくださったチームの仲間や周囲の方々、何をしても背中を押してくれた両親に心から感謝申し上げます。